

「としょかんに行こうよ つかおうよ」(15時間)

目標 公共施設である地域の図書館へ行き施設を利用する活動を通して、公共施設やそこにある公共物はみんなで使うものであることや、図書館を支えている人がいることが分かり、図書館に愛着をもち、大切に使ったり正しく利用したりすることができる。

時	学習活動の概要	指導上の留意点
①	<p>(ねらい) 読書の秋、だんだん号(ブックモービル)の本を読もう</p> <p>○松江市立図書館から来た移動図書館(ブックモービル)の本を読む。</p> <p>ブックモービルの中は、こうなっているんだね!</p>  <p>おもしろそうな本がたくさんあるね!</p>  <p>「本を読むのって、楽しいね」 「この車は、どこから来ているのかな」 「松江市立図書館って、どんなところかな」 「松江市立図書館に行ってみたいな」</p>	<p>○松江市立図書館(ブックモービル)との出会いを大切にする。</p>  <p>○松江市立図書館の職員と、活動のねらい等事前打ち合わせをしっかりと行う。 ○移動図書館や本とふれあう時間を十分に確保する。 ○本を読む活動を通して、「もっと本が読みたい」「松江市立図書館に行ってみたい」という思いや願いをもつことができるようにする</p> <p>POINT 1 松江市立図書館に行ってみたい!</p>
②		
③	<p>(ねらい) 松江市立図書館で、本を読もう</p>	
④	<p>○松江市立図書館に行き、本を読みながら、読書に親しむ。</p>  <p>図書館には、たくさんのお本があるんだね!</p>	<p>○松江市立図書館で、本を読む活動時間をしっかりと保証する。 ○読書活動と並行して、図書館の中の様子を見てみたいという子どもの思いも大切にする。</p>



「おもしろい本や私の好きな本がたくさんあるよ！」

「本がたくさんあっておもしろいところだね」
「松江市立図書館は、本が種類ごとに置いてあって分かりやすかったよ」
「本がどこにあるか教えてくれる人がいたね」
「おすすめの本が紹介してあるところは、学校の図書館と似ているね」

- 図書館の様子やそこで働く人，図書館の決まりなどに気付いている子どもの発言を価値づける。
- 学校図書館と比較している子どもの発言を取り上げ，松江市立図書館と学校図書館との違いに目が向くようにする。

⑤

(ねらい) 松江市立図書館と学校図書館の，似ているところと違うところを見つけよう

- 学校図書館の本の陳列の工夫や，おすすめの本コーナーの様子，図書館を利用する際の決まりなどを見つける。



「おすすめの本が，たくさんならんでいるね。これって，松江市立図書館にもあったかな？」

- 前時の松江市立図書館に行った時の様子を写真や日記を紹介し想起させることで，松江市立図書館との違いや似ているところを見つけることができるようにする。

「どんな仕事をしているんですか？」



- 子どもの思いや願いに応えることができるよう，学校司書と連携をとる。
- 必要に応じて，学校司書に子どもからの質問に答えてもらう。

⑥

(ねらい) 学校の図書館調べで，見つけたことを伝え合おう

- 学校図書館を調べて見つけたことを伝え合う。

「本の紹介カードがあったよ」
「本が種類ごとに並べてあったよ」
「学校司書の先生は，全校の子どもが本を好きになってもらいたいんだって」
「松江市立図書館は，どうかな。もう一回行って調べてみたいな」

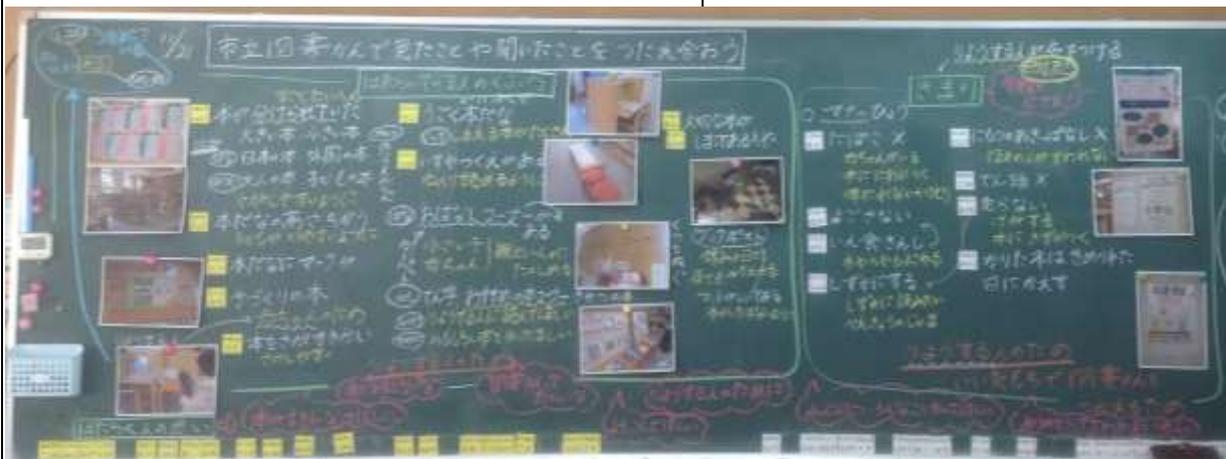
- 子ども一人一人が見つけてきた気付きを学級全体で共有することで，個人の気付きを全体の気付きとして広げる。
- 子どもが学校図書館で見つけてきたことを分類しながら板書することで，この後の松江市立図書館のことを調べる時の視点を明確にする。
- もう一度，松江市立図書館に行ってみようという願いをもつことができるよう

⑦	<p>(ねらい) 松江市立図書館に行く計画を立てよう</p> <p>○図書館で調べる視点を明確にするとともに、行き帰りで利用するバス（公共物）の利用の仕方を確認する。</p>	<p>にする。</p> <p>○前時をふりかえりながら、松江市立図書館で調べる視点を「図書館の様子」「図書館を利用する時の決まり」「図書館で働く人の思い」の3つにすることを確認する。</p>
⑧ ⑨ ⑩	<p>(ねらい) 松江市立図書館の様子や、そこで働く人の思いなどを調べよう</p> <p>○松江市立図書館に行き、そこで働く人に質問したり、館内を見学したりしながら、図書館の様子や利用の決まり、そこで働く人の思いや願いなどを調べる。</p> <div data-bbox="215 784 526 974" data-label="Text"> <p>図書館で働く中で、仕事で大切にしていることは何ですか？</p> </div>  <div data-bbox="231 1064 606 1344" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="614 1086 1189 1198" data-label="Text"> <p>図書館には、「走らない」「大声を出さない」など、たくさんの決まりがあるんだね</p> </div> <div data-bbox="614 1220 1109 1332" data-label="Text"> <p>学校の図書館と同じように、本が種類ごとに分けて置いてあるね</p> </div> <p>「図書館に利用の決まりがあったり本が種類ごとに並べてあったりするのは、図書館を使う人が気持ちよく使えるようにしているためなんだなと思いました」 「図書館で働く人は、みんなに本を好きになってもらいたい、たくさん図書館に来てほしいという願いをもっていることが分かりました」</p>	<p>○事前に松江市立図書館の職員と、活動のねらいや子どもの動き等をしっかり確認する。</p> <p>○前時で確認した3つの視点「図書館の様子」「図書館を利用する時の決まり」「図書館で働く人の思い」に沿って調べるようにする。</p> <p>○子どもがしっかり調べることができるように、調べる時間を十分に確保する。</p>
⑪ ⑫	<p>(ねらい) 松江市立図書館で見つけたことを伝え合おう</p> <p>○子ども一人一人が松江市立図書館で見つけたことを伝え合う。</p> <p>【松江市立図書館の様子】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本棚は子ども用と大人用とでは高さが違う ・休みの日でも本が返せるように返却ボックスがある ・小さい子ども用に、お話コーナーがある <p>【働く人の思いや願い】</p>	<p>・「図書館の様子」「働く人の思いや願い」「図書館を利用する時の決まり」の3つのグループに分けて板書することで、子どもの気付きを整理する。</p>

- ・たくさんの人に本を好きになってほしい
- ・たくさんの人に図書館に来てほしい
- ・図書館を利用する人が気持ちよく過ごせるようにたくさんの工夫をしている

【図書館を利用するときの決まり】

- ・大声を出さない
- ・飲食禁止
- ・携帯電話を鳴らさない



「みんなで伝え合って、『そうなんだ〜』とか分かってよかったです。これで今度パンフレットを作るときに作りやすくなったよ。1年生も図書館に行ってみたくするように絵や写真や字を分かりやすく書きたいです」

⑬

(ねらい) 1年生や友だち、おうちの人に図書館を紹介するためのパンフレットを作ろう

⑭

⑮

○松江市立図書館で調べたことや、前時でまとめたことをパンフレットにまとめる。

伝えたい相手として・・・

1年生、2年生の友だち、親

伝えたい相手が同じ子ども同士でグループを作り、パンフレット作りを行う。

ここに写真を貼って・・・、吹き出しで図書館の様子を書いてみよう！



こうやって書けば、1年生に分かりやすいかもね！

○これまでのワークシートなどを見ながら、図書館で調べてきたことや利用して気付いたことを想起できるようにする。

○「ぼくは、こうやったよ」「〇〇さんのやり方もいいかも」「もっとこうすればいいな」という考えを伝え合うことで、活動への見通しをもち、追求意欲を高めていく。



「友だちのアドバイスを聞いて作ったら、すてきなパンフレットができました。すごく分かりやすくなったと思うよ。早く友だちに見せてあげたいな」
 「このパンフレットを見て、松江市立図書館に行きたいって思ってくれるとうれしいな」



課外

(ねらい) ○○さんに、松江市立図書館のことを教えよう

○1年生や2年生の友だちに松江市立図書館のことを教える。

1回目よりも、2回目の方が上手に教えられたよ



- 相手意識をしっかりとつことができるように、どのような伝え方をすれば相手に分かってもらえるかを考える。
- 自分がおこなった図書館の紹介の仕方を1回ずつ振り返りながら表現できるように、違う相手に複数回伝えることができる機会をとる。

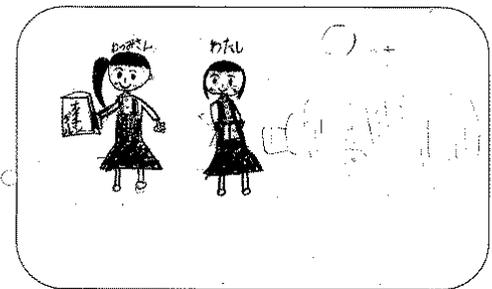
～ポイント解説～

POINT 1 単元の導入として、移動図書館「ブックモービル」と出会う場をもつ

単元の導入として、子どもたちが「図書館って、どんなところだろう」「図書館に行ってみたい」という思いや願いをもつことが、その後の追求につながると考えた。そのために導入として、松江市立図書館の移動図書館『ブックモービル』に学校に来てもらった。「読書の秋」にちなみ、学校にやってきた移動図書館の本を手にとって読むことで、子どもたちが「移動図書館には、おもしろい本がたくさんあるね」「この移動図書館は、どこから来たのだろうか」といった思いや疑問をもつことができるようにした。

子どもたちは、初めて見る移動図書館に興味を示し、移動図書館の中はどうなっているのか早く知りたがる子ども、車の中にはたくさん本があることを知り早く読みたいという気持ちを高める子ども、そしてこの移動図書館はどこから来ているのか疑問をもつ子どもなど、様々な思いや願いをもちながら移動図書館と関わったり読書をしたりしていた。

このように、単元を通して子どもの追求を持続させるために、導入場面に移動図書館と出会わせたことは、学習対象である松江市立図書館に対して「どんなところなんだろう」「そこに行って、本を読



分かったこと・気がついたこと・ふしぎに思ったこと

今日はじめてブックモービルの中へ入って、どの本もおもしろそうだし人だいたからどれを見ようか迷ってしまいました。2500冊の本の中からざっただけお気に入りの本が見つかってすごくうれしかったです。おたはまたブックモービルの中にある本しか見てないのでもう行った時は外の本を見たいから図書館かんに行ってほしい何時にも本を読んでほしいです。

んだり、見たり聞いたりしてみたい」という思いや願いを強くすることに有効であった。

POINT 2 気づきを広げ、深めるための学び合いの設定

子どもは、「こんなことやってみたい」「こうしたらどうなるかな」という思いや願いをもちながら追求していく。その追求が続いていく中で、「これを友だちに教えたい」「どうやるのか友だちに教えてほしい」「友だちは何を調べてきているのかな」という願いをもつ子どもが出てくる。子ども一人一人の気づきを個人の中にとどめるのではなく全体で共有することで、一人一人の気づきが関連づけられ、広がり深まっていく。そして気づきの質が高まっていくと考える。



本単元では、松江市立図書館で調べたことをパンフレットにまとめる際に学び合いの場をもった。パンフレットを作る中で子どもたちは「パンフレットには何を書けばいいのかな」「友だちはどんなパンフレットを作っているのかな」「上手にできたぞ。これを友だちに教えたいな」などという思いや願いをもっていた。そこで、子どもからこのような思いや願いが出てきたタイミングをとらえ、同じグループの中でパンフレット作りについて、どのように作っているのか、作り方などでアドバイスしてほしいことなどを伝え合った。そうすることで、子どもは新たなパンフレットの作り方（より相手に伝わりやすい表現の仕方）に気付いたり、自分の作ったパンフレットに自信をもったりすることができた。

学び合いというと学級全体で行うものというイメージがあるが、一律に学級全体で一斉にもつだけではなく、子ども一人一人のその時々思いや願いをとらえ、子どもの必要感に応じて小集団での学び合いの場を設定することも考えられる。上述したような必要感をもった子ども同士による学び合いを通して、一人の気づきがまわりの子どもに広がったり気づきがさらに深まったりしていくと考える。

成果と課題

今日、図書かんに行ってしらべたことをパンフレットにまとめました。1年生には何を教えたら、「わたしも、市立図書かんに行きたいな」って思ってくれるかを考えながら作りました。かきたいことがたくさんあって、ぜんぶはかけませんでした。でも、友だちに見てもらってアドバイスをもらいながら作れました。早く1年生にパンフレットで教えてあげたいです。それで市立図書かんに行ってほしいです。わたしもこれからはたくさん市立図書かんに行きたいよ。 (児童A)

これは、第15時に行ったパンフレットが完成したときの児童Aのふりかえりである。導入で移動図書館と出会うことで追求意欲を喚起し、子どもの「わたしも松江市立図書館に行きたい」「松江市立図書館のことをもっと知りたい」「松江市立図書館のことを友だちに教えたい」などといった思いや願いを引き出しながら学習を進めた。松江市立図書館のことを紹介するパンフレットを作る活動では、「友だちに教えたい」「友だちの活動の様子を知りたい」といった子どもの願いが出たタイミングで学び合いを取り入れることで、子どもの気づきが広がり深まった。

本単元の中では、市立図書館に2回訪問した。子どもたちの様子から、3回、4回と繰り返し活動を行うことでまた新たな気づきが生まれたと思われる。様々な学習段階で繰り返し学習対象と向き合える時間の確保が今後の課題である。

(文責 大坂 慎也)

「深い学び」を実現する生活科授業成立の要件

新学習指導要領の総則には、これからの授業づくりの課題がいくつか挙げられている。予測不能の変化の激しい社会を生き抜くための「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」といった3つの資質・能力を育成するための「主体的・対話的で深い学び」、教科特有の「見方・考え方」を軸にした授業改善、子ども、学校、地域の実態に柔軟に呼応していく「カリキュラム・マネジメント」等々である。とりわけ、「主体的・対話的で深い学び」の主旨は、具体的な活動や体験を通して自分の思いや願いの実現に向けて、他者と関わりながら問題解決を連続していく生活科の学習活動の意義そのものを語っていると言ってよい。

ところで、「主体的な学び」、「対話的な学び」は、子どもの学習の様相がイメージしやすく、またその趣旨も理解しやすいが、「深い学び」についてはその捉え方は多様である。生活科での「深い学び」とは一体どのような学習をいうのだろうか……。端的に言えば、それは、子どもの内に抱かれた気付きの質が高まることに他ならない。子どもが、対象への興味・関心を抱き、自らかかわる中で、対象（人、自然、文化）への感じ方が強まり、やがて気付きが自覚化される。そして、対象に繰り返しかかわるうちに、目に見えない人の心など、内面的なものへの気付きが生まれ、自分なりの明らかな根拠をもって気付きが深まり、やがては認識の領域へと気付きの質が高まっていく。このような学習の様相を生活科での「深い学び」というのではないか。このような「深い学び」を実現する授業を成立させるには、その前提としての「主体的で対話的な学び」の充実が問われることとなり、主に次の要件を満たす必要がある。

①主体性を育む豊かな体験を位置付けるカリキュラム・マネジメント

「深い学び」を実現するためには、連続的に展開されるプロセスの中で継続的に学びを深めていく必要があり、ある程度の長いスパンでの単元を構想・計画していく必要がある。そして、単元の中に豊かな体験を位置付けたカリキュラムをマネジメントすることで単元を貫くような主体性を喚起させ、主体的で深い学びに導くことができる。豊かな体験によって、子どもの学びに向かう力が醸成され、自ら対象への思いや考えを巡らす主体的な学習行為が成立する。主体的な分り方こそが生活科の気付きであり、豊かな体験を通して子ども自身が自ら気付く学びが実現していく。

②一人一人の気付きを質的に高める対話による学びの場づくり

活動や体験が豊かであればあるほど、子どもたちの内面には、直接経験から吸収した多様な価値が未整理のまま混在している。それらを一つ一つ顕在化し、価値付けていくためには他者との対話による学びの場が不可欠である。子ども同士の気付きの交流による深まりはもちろんだが、教師による子どもへの問い返し等による対話を通して、自分の気付きを整理させていく中で気付きの自覚化が促され、気付きの質が高まり、「深い学び」の実現に近づくことができる。

③実生活につなげて学びを深めていく学習の生活化

学んだことを自分の実生活に取り入れたり、活かしたりしていくことで、自ずと「深い学び」の実現に迫っていける。よりよい生活を創造する生活科の触発機能を高めたい。

（共同研究者：初等教育開発講座 高塚 寛）